戸田康之さん『コロナ禍でのろう学校』

戸田です。よろしく。
今日のお話は、このコロナ禍でのろう学校の今についてです。

今、私は埼玉県のろう学校で教員をしています。
コロナウイルスの感染拡大で休校になり、その期間は、私が担任をしている幼稚部の子どもたちも家で退屈しているだろうと、先生たちで手話による絵本の朗読など動画を作って配信し、家にいる子どもたちが楽しめるようにしました。
今は学校が再開し、幼稚部から高等部まで生徒たちは学校に通っています。しかし、子どもたちは感染が拡がらないよう日々手洗いをして消毒します。先生はというと、子どもたちが下校後、幼稚部にはおもちゃがたくさんあるので、それをひとつひとつ全部消毒をして、感染が拡がらないように気をつけながら学校生活を送っています。
また、今は誰もがマスクをつけていますよね。マスクをつけていると口元が見えないということがいろいろなところで問題になっています。ろう学校には寄付があって、フェイスシールドを企業が作って、生徒分を贈ってくれました。ですので、子どもたちはフェイスシールドをつけて授業を受けています。ただ、幼稚部の子どもたちにフェイスシールドはどうかと思っていたのですが、たまたま水遊びをする機会があり、フェイスシールドがゴーグルと同じ役割をして目の前で水を跳ね返すので、楽しそうに遊んでいました。
透明マスクもいただきました。これは企業からの寄贈ではなく、鳥取県に住むろうの高齢者のみなさんが手作りしたもので、これも生徒分を贈ってくれました。ありがたくいただいて生徒に配り、幼稚部の子どもたちも物珍しそうに使っています。

驚いたことがあって、子どもの描く絵が変わったんです。このコロナ禍で常にマスクをするなど新しい生活様式に変わってきています。その様子を見て子どもながらにいろいろ考えるようです。
休校が明け、子どもたちが久しぶりに登校してきました。ある女の子が好きな絵を書いていたので、私はその様子を見ていました。きれいな服を着た女の子の絵だったのですが、最後になんと顔にマスクを書いたんです。子どもたちが描いた絵で今までマスクをした人なんて見たことがありません。絵の中でもコロナに感染しないようにマスクをしなくちゃいけないんだと考えて描いたんだなと思いました。子どもたちは身の回りの社会や生活の変化を見たまま絵にしているんですね。でも絵に描くということは、コロナについて自分なりに考え理解をしているんだと思います。子どもの力ってすごいですよね。